

# 奈良高専 図書館だより

## 目次

1. 読書感想文コンクール  
総評と作品
2. 心に残る一冊の本

1992年3月 奈良工業高等専門学校図書館 発行

■■■■■■ 平成3年度 ■■■■■■

## 読書感想文コンクールを終えて

### 図書館委員会

毎年行われている夏休みの読書感想文コンクールは、今回で16回目になります。応募作品は584編の中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考した結果、次のように、11名の諸君の入選作を決定しました。氏名をここに紹介して、その栄誉をたたえたいと思います。

- |           |            |            |             |
|-----------|------------|------------|-------------|
| 1 I 中川 康子 | 母は枯葉剤を浴びた  | 1 C 寺崎 実子  | C・W・ニコルの海洋記 |
| 2 M 居谷多恵子 | 太陽の子       | 2 E 原田 寛之  | 翼をください      |
| 3 A 藤本 周作 | 東海道中膝栗毛    | 3 E 藤本 久徳  | 変身          |
| 3 I 中井 智也 | 海を見ていたジョニー | 3 C 東 紀子   | あの空は夏の中     |
| 4 C 今中見名子 | 象を撃つ       | 4 C 川久保ひとみ | アラブのゆくえ     |
| 4 C 町野 恭子 | 変身         |            |             |

この他に、選考の過程で優れた評価を得た諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

- |           |       |           |       |
|-----------|-------|-----------|-------|
| 1 M 加藤健太郎 | 田中 邦子 | 1 S 勝見 佳剛 | 前田 宗彦 |
| 1 E 大西 敏弘 | 松田 正豊 | 1 I 藤井 博文 |       |
| 1 C 山下 恵子 |       | 2 M 小野 幸哉 | 辰己 浩一 |
| 2 S 中井 亜子 | 松浦 太郎 | 2 E 森本 聡  |       |
| 2 I 森田 潤司 | 杉山 絵美 | 2 C 泉 真由美 | 神谷香奈江 |
| 3 A 今岡 秀樹 |       | 3 B 石本 拓也 | 中野 和佳 |
| 3 E 島 英彰  |       | 3 I 東田 晋平 |       |
| 3 C 中嶋 千恵 |       |           |       |
| 4 A 谷 修司  | 吉田 和陸 | 4 B 宗重 倫典 | 萩原 亮任 |
| 4 E 下村 信二 | 吉田 輝正 | 4 I 高橋美帆子 | 増田 拓生 |

選考の仕方は、今年は〔文学以外の部〕の2部立てを止め、最優秀賞、優秀、佳作の区別も止めることにしました。また、上級生だけでなく全学年を通じて自由に対象作品を選べることにしました。

全体で574編の中から、第1次選考をパスした作品について更に選考を重ね、上記の諸君の作品を選挙に決定しました。選考の最終段階では、13人の先生方が、書き手の氏名を伏せて読み合わせ、投票によって決めました。その際には、何年生の作品か学年も考慮の対象に入れております。

今年度の特徴として、他のメディア、たとえば映画やビデオ、漫画などとの関連で対象作品を選んでいる応募作が多いように見受けられました。原作を漫画化、ビデオ化されたもので知り、その後に読んでみようと思ったり、また映画を見逃したので原作を読もうと思って取り組んだ人が少なくありませんでした。このような傾向は近來の傾向ですが、今年は特に顕著でした。

総じて、今回の応募作品はどれもよく書けており、努力と苦心の跡がうかがえました。多くの作文を読み選考するのは苦しい作業ですが、文面から感じられる諸君の真剣さに励まされて、やり終えることが出来ました。「読んでよかった。」との一言に出会うと、苦勞も吹き飛んでしまいます。

入選作はいずれも、自分の目でしっかりと見、深く考え、的確な表現に努めており、高く評価できるものです。次に、その入選作を紹介しましょう。読み比べて、参考にしてほしいと思います。

なお、今後は感想文の末尾に、著者名と出版社名をぜひ書き加えて置いてください。

## 「母は枯葉剤を浴びた」を読んで

1 I 中川康子

私はこの本の中の写真の子供を見た時、正直言って、息がつまりそうになりました。脳のない子、ひとつの体に二つの顔がある子、胴体のない子……。かわいいはずの赤ん坊がどうして？

アメリカ空軍によるベトナムでの枯葉剤作戦は、1961年に始まりました。ベトナムのジャングルや田畑に枯葉剤をまいたのです。

「枯葉剤がどうしたの？ そんなもの植物をからすだけの薬にすぎないじゃないか」

私は初めそう思っていました。しかし、それは大きなまちがいでした。実は、ベトナムでまかれた枯葉剤の中には、人類が知る化学物質の中では桁はずれの劇毒性をもつ猛毒ダイオキシンがひそんでいたのです。アメリカ軍は、『ダイオキシンが85グラムもあれば、百万もの人を殺せる。』という事実をつかんでいながらも、10年間もベトナムの地にまき続けました。それも『何も人体に害はない』とまで宣伝して……。アメリカ陸軍省の訓練テキストにまで書かれてあったというのですから、誰が自分の身を守るのでしょうか？「人体への害をかくしてさえいなければ」と思わずにはいられませんでした。

では、敵だけではなく、ベトナムで戦っていた味方の方も、被害にあったのだろうか？ 私が思っていたことは、的中していました。今でもベトナムだけではなく、加害者のはずだったアメリカにも、ひどい皮膚炎に悩まされていて、仕事が手につかない人も少なくないそうだ。

長い戦いが終わり、幸福が来ると思ったのもつかの間、枯葉剤を浴びた土地には、食物となる植物が生えてくるどころか、今も草木が枯れたままになっているそうです。ダイオキシンという毒は、土の中では分解されません。放射能と同じようなものだそうです。何てひどいところだ、と私達は思うのですが、ベトナムの人はその国にしがみついて生きていく以外、どうしようもないのです。

「この頃とりあげる赤ん坊の中で、半分以上が流産か死産で、奇形の出産も多いね。」とベトナムの助産婦は言います。これもやはり、枯葉剤が原因なのでしょうか？ 何年か前に日本に来たベトナムちゃん、ドクちゃんもそうです。あの子達が産まれた時、お母さんも助産婦も気絶したそうです。しかも、お母さんは「自分の子ではない」と言いはったのです。あの子達のお母さんだけではありません。ある人は、自分の奇形の子供を森に捨てました。また、ベテランの助産婦は奇形の赤ん坊が生まれると、お母さんのへその緒だけしか結ばないそうです。どうせミルクをやらないで放ったらかしにしておくか、森に捨てるかなので、出血多量で死亡したという事にしておくのが、子供にとっても、親にとっても、一番いいのだそうです。ひどいと思います。よりによって自分の子供を捨てるなんて。

一体、何がこんなに人を変えてしまったのでしょうか？ 戦争です。『戦争』それは人間同士の戦い一人の心までも武器にしてしまう。こんなくだらないことをしていったいどうなるのだろうか、と私はよく考えるのですが、きっと私と同じ考えの人も多いことでしょう。私達はこれからも

そんな考えをもち、苦しんでいる人に手をさしのべなければならぬのです。そして多くの人を、外からも内からも救おうとするのです。人間だという誇りをもって生きるのです。戦争という臆病な手を使わないで……。

## 「C・Wニコルの海洋記」を読んで

1 C 寺崎実子

この本を書いたニコル氏は、過去18年間海洋哺乳類と、それに依存して生きている民族と文化の研究をしていました。

この海洋記に書かれている日本の捕鯨に関する事も、その研究の一つです。それは、鯨の全てを必需品として使用してきた私達日本人の生活を正確にとらえ、正しく評価しています。昔から日本は鯨を必要としていて、太地や鮎川などで捕鯨業が盛んでした。他国では、反捕鯨運動が盛んになり、マッコウ鯨などが減少していると言い、捕獲数も制限されたりしていますが、私は、この本を読み、鯨の数が減少していると言われていた根拠がどこにあるのかを不思議に思いました。反捕鯨運動を行っている人達は、鯨を殺して食べるということが残酷とか野蛮などと言っていますが、はたして本当にそうなのでしょうか。この本は、そういう偏見にも分かりやすく答えてくれています。アメリカなどでは、広い牧場などがあり、育てた牛や豚・にわとりなどを殺して食べていますが、日本には、土地がなく、海が牧場の役目を果たし、鯨が牛や豚の代用として、いや、それ以上に必要としている状態を、太地や鮎川の漁港の取材を通して、日本の捕鯨業のあり方を私達日本人にも分かりやすく説明してくれています。

私が去年の夏休み、太地の鯨博物館に行った時、鯨一頭からどんなものが得られるのかが、表で表されているのを見ました。その中に鯨油（頭の油）がありました。父は「アメリカの捕鯨船はこの鯨油のためだけに鯨を殺し、日本人が必要としていた肉は全て捨てていた。」と教えてくれました。日本では、考えられぬ出来事です。江戸時代、太地では1頭の鯨で7村潤うと言われていました。アメリカは、その大切な肉を捨てていたのです。それなのに、アメリカでは、反捕鯨運動の人々は、日本は残酷だ、野蛮だと言い続けています。鯨捕りの人々は、この捕鯨運動に腹を立てています。

それは、謂われのない言いがかりにすぎないからです。文化の違いにより、地球上の人間は種々雑多のものを食べます。これをどうして、牛なら良い、あるいは、魚なら良いと決めつけられるのでしょうか。反捕鯨運動は、単純に鯨を食べるなど言うだけでなく、日本の文化が抹殺されるに等しいのです。自然保護に名を借りた暴力だと私は思います。資源のない日本は、鯨が必要なのです。ヒゲ一本あますことなく必要なのです。

日本の近海では、昔から鯨が豊富でした。子連れ鯨をとらず、そのままにしておいてやり、大人の鯨だけをとっていました。これは、日本人がいかにも資源を保護していたかという一例です。徳川末期、日本の近海は、外国の鯨捕りたちの絶好の漁場となり、アメリカなどから捕鯨船が、鯨を捕獲しに、太地沖などまできました。そのため、補給基地として、日本の漁港が必要となり、開港を求めてきたというのも、歴史の事実です。アメリカなどの他国は日本の漁港を足場に、すすんだ捕鯨技術で乱獲したため、日本の近海から鯨が減ってきたのです。

私はこの本を読んで、日本は世界で一番無駄のない鯨の解体をし、そして、その使い方も一番上手だったのだということを知りました。この本によると、太地や鮎川など、鯨を捕獲する町では、鯨肉がキロあたり150円で売られていたそうです。そして町の人々は、これほど安くておいしい肉はないと言っているそうです。

ニコル氏は、海洋学者として、正確な目で鯨の研究をし、そして発言しています。

日本はいつまでも鯨を必要としています。そして、決して鯨は減りはしないと。

## 「太陽の子」を読んで

2 M 居谷多恵子

沖縄の叫びとでもいうべきものが聞こえてくる様な本だった。戦争体験のない私達にとって沖縄戦争とは、第二次世界大戦末期の沖縄での悲惨な戦争くらいの知識しかない。しかしこの本は、今まで見たどんな資料、そしてどんな本よりも、私にとって沖縄とは何であるかを感じさせてくれたと思う。

この本の舞台になっているのは沖縄ではない。主人公も戦争体験者ではない。小学校六年生の彼

女は、両親や周囲の沖縄県出身者と接し、沖縄の歌、踊り、あらゆるものを通して徐々に沖縄の悲しみ、苦しみを知っていくのだ。私は読み進めていくうちに彼女と一体となり、彼女と共に喜び、悲しみ、苦しむ、そして一沖縄一を知っていった。戦争の資料や写真集等は確かに多くのことを私達に語りかけているのだろう。しかし今まで私はそういった物を見ても、何か一つの壁を隔てた、違う世界での出来事としか考えることができなかった。いくら実際に起こったことだと考えてみても、自分の日常の生活で考えてみるができなかったのだ。しかしこの本を読んでからは、それらの写真や資料がいくら生々しい、残酷なものであってもそれは一当時一のものであって、当時その写真の場所で、又は品々と共に戦争を体験された方々の一今一までを伝えることができないからではないか、と思うようになった。この本は戦後30年した神戸でなおも沖縄戦がどんなに深い根をおろしているかということを私に訴えかけてきた。今なお戦争に脅える人、自分で自分の子供を殺した人、体の一部をなくした人……。そのような人々がどれくらいおられるのだろうか。沖縄戦経験者で過去をもたない人はいない。しかし今なおそれらをひきずりながらも人々は限りなく優しく生きている。登場人物達は人の幸せを願い、自分のためではなく人のために泣く。その彼らが持つ他人に対する一優しさ一とは、過去にとっても辛い思いをした人だけが持てるものかもしれない。「つらいめにあってきた人ほど、そうしてはならないという思いも人一倍つよいはず。」悲しい思いをした人ほど人の悲しさをわかることができるということなのだろう。この誰をも包み込む優しさを果して今の私達がどれほど持っているだろうか。自己中心、無関心な人間の多いこの今、はっと何かを気付かせてくれる場面が数多くあった。

わたしは著者の書きたかったことの数分の一もわかっていないかもしれない。そしてこの文章もわたしの感じたことのすべては到底書き表せていない。しかし私はこの一冊によって沖縄の苦しむ、悲しみ、また、人のやさしさ、人を愛するということは、という難しいことをほんの少しでも知り得たと思う。沖縄についての知識を得、他人に対するやさしさについて考えさせてくれたこの一冊にめぐり合えたことを嬉しく思う。

## 「翼をください」を読んで

2 E 原 田 寛 之

この物語は、三年ほど前のテレビドラマを小説化したものです。進学校の県立校と、落ちこぼれの通う私立校。そんなふたつの高校を舞台にしたこの小説は、その人の価値が学歴だけで決ってしまうという、今の日本の大きな問題を題材にしています。

私立花房学園の生徒は、町の人や県立の生徒からバカにされていました。まるで同じ高校生として扱ってもらえません。生徒たちはそんな立場がたまらなくて、誰にも会わないように朝早く学校に来たり、帰る時はネクタイを隠して歩いたりします。

そんな彼らが、文化祭を機会に、自分たちの心の叫びを、人々に聞いてもらおうとします。学校でやることは同じなのに、学校の違うだけでどうしてこんなあつかいをうけなければならないのか。それはこの小説の中だけの問題ではないと思います。

僕は高専に入る時、悩みました。みんなと同じように、普通の高校に進学したほうがいいのか。まわりの人はいろんなことを言いました。高専なんか行くなとか。自分がしたいことができるんだから迷わず行けとか。でも、最後に言うことはみんな同じでした。

「絶対、大学には行けよ。」

僕も、最初はそう思っていました。でも、なんのために大学に行かないといけなの。それが心にひっかかっていた。そんな時にこの本を読んだのです。

学歴社会はダメだと、いろんな人が訴えてきました。でも、みんな頭ではわかっている、心のなかでも、どこか学歴の低い人を見下すような気持ちがあったと思うのです。僕もそうでした。本当の彼らの気持ちなんか、分かってなかったのです。この小説は、彼らの声を僕に伝えてくれました。筆者も、高校を中退し、若いときは学歴コンプレックスに悩んだ一人だそう。主人公たちも、最初は何も話そうともしませんでした。そんな彼らがだんだん語りだします。どうしてこんな生き方をしなければならぬんだ、どうしてこんな目にあわぬといけぬんだ。その叫びは、読む



るのは行商をしなくてもいいような大きい商人かひまな学者か、内職をしなくてもいいような石取りの武士か、しかも一九の高度な洒落の一つものこらず理解しながら読めるのは、「注釈付き東海道膝栗毛」を読んでいる我々現代人だけかもしれないとふと思った。

## 「変身」を読んで

3 E 藤本久徳

僕は今まで、物語の本を読む方法として文字で描かれている情景を頭の中で明確なイメージを作っていくというようなものを用いていた。この方法は小説などを読んでいるうちにいつの間にか身についたもので、この癖のおかげで「変身」を読むのには苦勞させられた。グレーゴルの変身した虫のイメージがなかなか掴むことができなくて、まあ人によってこの虫をイメージした形は千差万別であるが、物語も中盤に差し掛かった辺りで、やっと黄金虫を少し平たくしたような感じの虫のイメージができあがっていた。このイメージができてから僕は最初からもう1度読み直し始めた。

グレーゴルの家族、父親と母親そして妹の行動や考え方、感じ方全てが僕にとってピンとくるものがなく理解し難いものだった。グレーゴルの部屋から現れた巨大な虫に対しての対処がどうも納得できなかった。内側から鍵をしていたグレーゴルの部屋からグレーゴル本人ではなく虫が出てきた理由を外側から見ていた者が考えるとしたら、グレーゴルは外交販売員という仕事柄いろいろな土地に行くためどこでそんな虫に姿が変わってしまうような病気になってしまったというものか、どこかで捕まえてきた虫が巨大化してグレーゴルを食べてその場にいるというものどちらかであると思う。もしグレーゴルの家族が前者のような考え方で事態をとらえていたとするなら、今まで自分達の事を思い養ってくれていたグレーゴルに対して何故手厚い看病をしてあげないで冷たくてどこかとげのある態度で接するのかと思えてしまう。後者のようにとらえていたとするなら、今までよくやってくれたグレーゴルが食い殺されてしまったということ認めたくなく、そして自分達の気休めのためいやいやながらもこの虫をグレーゴルとして面倒を見ていると考えることができ家族のあの冷たい接し方も理解することができる

のだが、作品中にどうも家族がこのように考えているとほのめかすような表現が一つもなく僕にはグレーゴルの父・母・妹は前者のような考え方をしているとしか思えなかった。しかしグレーゴルが虫になってしまったことを違和感なく日常茶飯事のように感じさせながら話を進めるところがカフカはすごいと思った。僕はこの作品を読み終えるまでそんなことを深く追究しようなどと微塵にも思わなかった。この作品を一通り読んで僕にはどうも腑に落ちない点があいくつもあった。作品の始めにあれほど長々と書かれていたグレーゴルの仕事に関する悩みがあまりにあっけなく終わってしまうこと、父親がグレーゴルに対して冷たくあたること、新しい手伝い女がグレーゴルつまり虫の姿を目の当たりにしても平然としていられること、3人の紳士達の行動と存在理由、主人公であるグレーゴルのあっけない死、それから前にも書いた家族のグレーゴルに対する接し方や何故グレーゴルは虫になってしまったのかということ、そしてこの作品の根底にあるテーマが何であるのか。これらの疑問全てに対して僕は僕自身の解を得ることができなかった。

ここまで僕の感想を述べたが、結局僕にとってこの作品はどこを取っても掴みどころがなく、足元もおぼつかない感じのものであった。しかし、この考え方が実はこの作品的を射ていることなのかもしれない。

## 「海を見ていたジョニー」を読んで

3 I 中井智也

「海を見ていたジョニー」というのは五木寛之の短編小説です。この小説は夏休みに入って読んだものではないのですが、もう一度読んでみて、やっぱりこれにしよう、と思いました。

姉の由紀の経営するピアノ・バーを手伝う中学生のジョンイチと、ベース弾きの健ちゃん、そしてジョニーを中心として話はすすんでゆきます。途中、ジョニーの言葉にこんな言葉があります。「音楽は人間だ。わたしが駄目な人間になると、音楽も駄目になる。わたしが高まると演奏も高まってくる。音楽は人間の内面を映す鏡みたいなもんだ。」僕は本当にそうだと拍手したくなりました。でなければ音楽が人を感動させたりできるはずがないと思ったからです。僕も音楽をやっているの

で、いつか、下手でも、人を感動させるような音楽ができればと思っています。

話がすすめばすすむほど、ジョニーという人物にひかれ、彼の信念に共感する気持ちも強くなります。しかし、ジョニーはベトナム戦争へ行くことになり、話に少しずつ暗い影が落ちてきます。由紀がジョニーの金を流用したことからジュンイチは孤独になってしまい、また戦争から帰ってきたジョニーは心に深い傷を負っていたのです。彼がひいたピアノが再び仲間を感動させた時、ジョニーは自分の信念が間違いであったと感じ、音楽さえも信じられなくなってしまいます。彼はこう言います。「汚れた卑劣な人間でも素晴らしいジャズが弾けるなら、ジャズとはいったい何だ！それはただのテクニックだけの遊びじゃないか。戦争に行っておわたしは人間を信じられなくなった。そして今、ジャズさえも信じられなくなってしまったんだ。わたしはいったいどこへ行けばいい？」そしてジョニーはピアノに四発、由紀をだましていたマイクに一発、そして自分に一発、弾丸を撃ち込んでしまいます。

僕はジョニーの最後の判断が正しいとは思えません。ジョニーは純粋な被害者であって、自分の命を断ち切らねばならないような悪者ではなかったと、そう思います。たとえ彼がベトナムで何人もの人を殺したとしても、彼はあくまで被害者なのです。ベトナムで死んだ人々は確かにジョニーに殺されたかもしれないが、本当は戦争そのものに殺されたと思うのです。そして同じようにジョニーも、戦争そのものによって死へと導かれた一人だとおもうのです。だから彼の弾いた音楽は彼自身の内面を正しくうつしだし、彼自身の悩みの重みをも反映してジュンイチ達に深い感動を与えたと思いたいのです。

戦争というものをこんな形で見せつけられ、はじめ僕は当惑しました。戦争とは全く無縁の人達を悲しませるのが戦争なんだとも思いました。本当の戦場のシーンは一つも描かれていませんが明らかにこの小説では戦争によって何もかも奪われた一人の男が描かれていました。そしてそれだけで戦争の悲惨さを伝えるのに十分でした。

## 「あの空は夏の中」を読んで

3 C 東 紀 子

銀色夏生は詩人である。そしてこの「あの空は夏の中」はその詩集のひとつである。いつもながら、この人の感性というものには、ハッとさせられてしまう。どんな人物よりもこの人は私にとっては詩人である。

彼（もしかすると彼女であるかもしれないが）は本の最初にこう書いている。「私は孤独である限り、詩を書き続けるでしょう」彼がこれ程までにいい詩を書けるのはそのせいなのか、とその時思った記憶がある。孤独な彼が書くからこそ、彼の詩はあんなにも私を元気づけ、時にはその感情にひきこんでしまいそうな哀しい言葉が出てくるのだなど。

詩というものは、作者の感情が伝われば伝わるほど、そして読んだ人にその感情を抱かせたものほど良いものではないかと思う。小説に關したって同じ事であろうが、小説は話の展開で読者をひきつけることができる。しかし詩は、ほんのわずかの言葉で、それでいて何かひかれるものがあるのだ。そして彼の詩のいくつかは、私のそして読者の心の中の言葉でも引き出しているような気がする、共感してしまう部分があるのだ。

「何もかもすっかり変わってしまったけど、変わらなくてもいいんだ。」という言葉が出てくる。数年前と今の自分を見比べて、どれ程変わったことだろう。自分のやりたい事を何もためらわずにやっていたその頃の自分。周りの目を気にするあまり立ちつくすばかりの今の私。いろいろな事を覚えていく程、何かを少しずつ忘れていっているような気がする。それは忘れてもかまわないような、つまらない事だったのだろうか？今の私から見ればつまらなくても、本当は何よりも大切な事ではなかったか？この詩のように、変わらなくてもよかったのではないのかと思わされた。彼の言葉はいくつも、私の心の中でこんなふうに様々なことを考えさせてくれる。

全くの余談になるかもしれないが、私は時々、同好会の会誌に詩のようなもの、彼の詩から見れば私のは詩とはいえない、を書くことがある。つたない文章であるがそれでも自分の内部にある思いを少しでもうまく表現したいと思って、そして

誰かひとりでもその思いが分かってくれたら、と思って書いている。とても彼のようにはいかない。私は孤独だと思える時だとか、自分の感情のその時その時の波のようなものを言葉にしたいと思うのであるが。

流れるような彼の言葉のひとつに、共感したり考え込んだり、一喜一憂して私は彼の詩に、彼のつくり出す世界に入り込む。作者の言葉の中に、「どうぞ幸福になって下さい。私があなたを守ります」とある。彼は人の感情、喜びとかでなくて、哀しみとか淋しさとか、といったような思いを、彼自身が孤独であるが故に、逆にそれに対するなぐさめ方を心得ているのではないかと思う。

最後のページに「伝えたい気持ちがたくさんあります」とある。伝えたい言葉をそのまま出すことのできる彼が少しうらやましく思えることもあるが、少しでも多く彼の思いを受けとめて、自分の心に留めておこうと思いつつ、私は本を読み終える。

## 「象を撃つ」を読んで

—オーウェルの生涯—

4 C 今 中 見 名 子

「象を撃つ」は、オーウェル（以下彼とする）の体験記であるので、彼の生涯を織りまぜて紹介したいと思う。彼は、中流階級の生まれでありながら上流階級の学校へ特待生として入学、周囲の子供たちの優越感や軽蔑にたえ、被支配者として苦痛の毎日を経過す。被害者意識をうえつけられた時期である。卒業後、支配者被支配者関係を露骨な形で見せつけられる植民地で、警官という地位につく。「象を撃つ」はこの時期の体験記である。彼は、黄色い顔からのケチな悪戯に悩まされ、神経をすりへらし、圧制者に対する根強い反感を実感していた。彼は、原住民虐待を続け、支配機構の一部として働くことに嫌気がさした。自分の職を嫌悪し恥じていた。彼の目には日常のどんな些細なことでも、おそらく見るもの聞くものほとんどすべてが、人間による人間の支配の不合理と不法を痛感させただろうと私には思われる。彼は、帝国への憎悪と、自分の職務を妨害しようとする悪質な畜生どもへの怒りの間で板挟みになった。私は、「象を撃つ」こそが、彼の生涯と政治的意志方向をみつける第一ステップをそのまま書き表したものと思ひ、又彼の政治のとらえ方があ

ざやかに見てとれると感じた。彼の作品の魅力と特徴は、自分自身の体験から出発し、自分の目で見、耳で聞き、肌で感じたことを踏まえて書かれたものであることだと私は思う。私は、矛盾の多い生身の人間をあくまでも離れないその姿勢に共感を抱くが、主観的に流れ、客観的妥当性を欠いているという評価もある。

「象を撃つ」は、狂暴化した一頭の象を射殺するに至る彼の一日を記したものだ。象の描写やその挙動を老婆にみたてる辺りから、彼の動物に対する深い愛情が見てとれる。また具体的で切実な動物への同情が働いていたことも明らかだと私は思った。象は苦力（ビルマ人の労働者）を殺し市場で暴れたが、彼が象を探し当てた時すでに静まっていた。彼の取るべき行動は象の様子を見守り象使いを待つことだ。なぜなら象は高価で、無能な苦力より役立つのだ。しかし、彼の背後には大勢の民衆が、象を撃つというおもしろい観物に集まる。群衆は観物を期待している。その黄色い顔の海を振りかえり、象を撃たねばならない！群衆の意志には逆らえられないと悟る。圧制者は自分自身の自由を失う—原住民を感心させ、期待に答え、毅然としていなければならない—彼は白人支配の虚しさを垣間見た。彼自身が、いかに自分の職を嫌悪し帝国主義を否定しようが、この場では問題にならない。彼は白人の代表で、撃たなければ嘲られる。この時彼は、どう処理していいのかわからない危機感におそわれたと私は思う。心ならずも象を射殺しなければならない羽目に追い込まれ、銃をかまえ、引き金を引く—彼は大衆の意志という魔術によって象を射たされたのだと私には思えた。しかし、事実としては白人が問題処理したという形にすりかわる！後に残るのは、民衆に肉を刻まれ骨だけになった象と、気にも止めなかった苦力の死で彼の行動が合法化されたという言訳だけだ。どちらも虚しさの象徴のように私には思えた。事件の真実は、支配者側の一人として黄色い顔に嘲られたくなかった故に彼は象を撃った。しかし、大衆も白人もその真実には気付かないだろうと私は思った。なぜなら、生活の上手な真実よりも事実を優先するであろうと思うからだ。しかし、真実は彼の感覚に強烈な衝撃を与え、支配者对被支配者関係というひとつの抽象観念が、なまなましい具体的現実となって彼の胸を打ち、彼の態度の決定を迫ったのだ。この後彼は職を退き、



矛盾にみちた現実を何より重視するという態度のもとにやがてルポライターとなり、スペインでの内戦に民兵として参加した経験より、一貫してあらゆる全体主義的思想の鋭敏な批判者として活動する。

## 「アラブのゆくえ」を読んで

4 C 川久保 ひとみ

今まで、アラブ・中東について何の関心も知識持たなかった私が、この「アラブのゆくえ」を目にして興味をもち、この本を読むに至った動機は、まだ記憶に新しい湾岸戦争であった。

私が湾岸戦争という問題を知ったのは、昨年一月中旬であった。当時は、なぜこのようなことになってしまったのか、なぜイラクは突然クウェートに侵攻したのか、全く理解できなかったし、遠い国の話だと、気にもとめなかったのだ。しかし国連の、イラクに対するクウェートからの撤退期限がせまるにしたがって、断固として撤退を受け入れようとしない、フセイン大統領の異常な不気味さや、戦争勃発の危険性などに関する報道により、今まで感じたことのなかった、得もいわれぬ緊迫感が私を襲った。その時の、行き場のない不安感は、半年以上たった今でも鮮明に思い出させる。そしてついに多国籍軍による武力行使が始まってしまった。戦争は一ヶ月程で終わったものの、直接の犠牲者をもたらしたばかりでなく、油井の炎上や原油流出による環境汚染、破壊や、さらにはクルド人難民問題など、数々の問題を残してしまっただけである。

この本の内容は、湾岸危機の原因となったアラブ・中東世界における宗教、民族問題や、この地域の悲劇的な歴史などを解説したものであった。初めのうちは、予想通り内容が難しく、そのすべてを理解しづらかった。歴史にしても、旧約聖書からの抜粋により、紀元前にまでさかのぼっており、この長い歴史に関連してくる宗教・民族問題も、実に複雑なものであった。しかし、読みすすめていくうちに、だんだんと話が見えてきたのである。

20世紀初めに中東で発見された石油をめぐる、ヨーロッパ列強がアラブに進出、支配するようになったために、中東は様々な苦しみを背負う運命となったのだ。列強諸国は、自分達の利益のため

に罪もないアラブの人々の心をふみにじり、ついには中東分割という、地域の人々にとって堪えがたい苦しみをなすりつけたのである。問題はそれだけではなかった。ユダヤ・アラブ間の対立問題である。両民族は互いに迫害・入植・暴動をくり返し、長い間絶えず対立してきた。その結果うまれたのが、イスラエルというユダヤ人国家であった。イスラエルはみるみるうちに軍事力を増大させ、アラブ住民を大虐殺するなどして攻撃を続けた。これがきっかけとなって第一次中東戦争がおこり、この戦争で勝利を手にしたのはイスラエルであった。この結果、イスラエルはパレスチナ全土のうち80%を自国領土としたため、多数のアラブ人が難民となってしまったのである。そして第二次、第三次と戦争をくり返すたびに、難民は増えていき、今もなお、この問題は解決できないままなのだ。

戦争という残念な結果に終わってしまった湾岸危機は、サダムフセインの野心のみがきっかけで起こったものに私には見えた。しかしこの本を読んで、やっとわかったのである。フセインがなぜクウェート併合を正義と主張したのか、米・英を目の敵にして徹底抗戦したのか、またなぜイスラエルにスカットミサイルを撃ちこんだのか。彼は断じて許すことのできない誤ちを犯してしまった。しかしそれは、アラブを愛するゆえだったのだ。方法としては間違っていたにせよ、この問題を解決しなければならないことだけは確かである。なぜならパレスチナ問題の解決なくして、二一世紀の全世界の平和と安定はありえないからだ。そして我々はこの事実をしっかりと受けとめなくてはならない。私はそう痛感した。

## 「変身」を読んで

4 C 町野 恭子

私は、このカフカ作の「変身」をくり返し読みました。それは、内容が面白かったからではなく、小説の意味が分からなかったからです。作者が、この本を通して、読者に何を伝えようとしているのかを理解できなかったのです。この小説は、今まで普通に日常を過ごしてきた若いセールスマンである主人公が、ある朝、突然、一匹の大きな毒虫に変わってしまうところから始まります。あまりにもいきなりすぎる出だしに私は驚きました。

そして、主人公ザムザが、その異変に少しも驚かずに、また、その原因を追求しようともせずに、相変わらず、人間の思考を働かせ、日常を続けて行こうとするのには、ア然とさせられました。読者である私が、こんなに驚いているのに、小説の中の変身した当の本人には、驚きが全くないのです。だからこそ、私は一層驚かされたと共に、一種の不気味ささえ味わいました。そして、読み進めていくうちに、いつかは、ザムザが突然虫に変身してしまった理由に出合えるだろう、と思っていたのですが、とうとう、最後まで理由は分からずじまいで、読み終わってしまいました。

それよりも、もっと私を強く魅きつけたのは、この小説に最初から最後まで、根強く残る残酷さでした。今まで一家の支柱となって一生懸命に働いてきたザムザが、虫に変身してから、家族や他の人々から忌み嫌われ、家庭から、そして世間から疎外され、孤独の中で死んでいくのです。あくまでも、家族の生活を心配しながら……。この状態を残酷と言う他にないのではないのでしょうか。そして、この残酷さは、ザムザの変身を機に一転する家族の悩み多き、しかし、淡々とした日常生活によって、あらわになり、さらに、一家が、この虫は彼ではないかと自分達に言い聞かせ、新たな生活を求めて旅立つ姿にによって、一層残酷さを極めるのです。この超現実的な話に、なぜか私はぞっとしました。こんな話あるわけないと思

いながら、一笑してすませられない何かがあるのです。その何かはなんなのだろう。私は考えました。そして、この話が、一見現実離れしているようだけれど、実は現実と密接に結び付いているのではないかとひらめき、笑いとはせない原因はこれなのだと気付きました。自己を犠牲にして、また放棄して生きている現代人。ザムザもまた、自己を放棄して、一家のために、主人のもとで身を粉にして働き、こき使われ、ふと「なぜ、こんな生活をしなければならぬのだろう」と思い、自己を大切にしようとした時に、毒虫に変身し、世間から疎外されるのです。自己放棄は、社会の中で完全に生き、所属していける1種のライセンスだと思います。そして、そのライセンスを自分の意志で捨てたとき、社会は一斉にその人を閉め出し、孤独の世界へ押しやるのです……。これは、私の憶測ですが、作者は、超現実的な話をもってくることで、現実の非人間化を鮮烈に風刺したかったのだと思います。作者が「変身」という比喩を作った意味が、ようやく分かったような気がしました。

でも、これから私も社会に出て、自己を放棄しながら社会に所属していくのだろうか、という不安がよぎりました。そして、自己自身であろうと意識した時、私も社会から閉じ出されるのでしょうか。でも、その時は、変身は変身でも、別な意味での「変身」が出来る強い人になりたいと思いました。

## 心に残る一冊の本

—あなたにも薦めたい— (その2)

### やさしい経済の本

最近経済問題で目立ち過ぎの日本への批判、働き過ぎの日本人への批判、コメを自由化しない日本への批判……。すべて日本経済が日本国内だけの問題で無くなっていることを表している。

そんなこともあって昨年の夏頃から暇を見つけては、この1、2年出されたいくつかのやさしい経済の本を選んで目を通している。

「テラスで読む日本経済読本」(日本経済新聞社)は新版になって、レベルは落とさずにやさしく書かれている。

「経済がわかる本」(ダイヤモンド社)も新版になっている。同じく日本経済の仕組みがわかりやすい。

「国際経済学・入門」(JICC出版局)は対話形式になっている。三日間の経済学シリーズの一冊であるが、とても三日で読めず、「学」がつくだけあって難解であった。

その他にもバブル関連などいくつかあるがどれも本質的でないように思う。

変化する経済の大きな流れを的確につかまえるには、何が変われば何にどう影響するのか、だから何が大切なのかを少しでも理解しておきたいと思うが、素人にはなかなか難しい。

(化学工学科 井口高行)